
百合とライオン

矢藤勝海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百合とライオン

【NZコード】

NZ8935F

【作者名】

矢藤勝海

【あらすじ】

友情甘味付かな女子高校生ふたりの話。若干へたれの主人公とツンツンの親友の放課後。ほのぼののと/orより、ばつさりあつさり、でもベタ。甘めの友達話が読みたい人向け。

自分の名前とともに「16年過ぎ」した。

日本人の平均寿命を鑑みるに人生の序盤をやつとクリアしたあたりだが、そろそろ自分の名前に異議を唱えてもいいはずだと思う。要するに、「百合」という名前があまり好きではない。日本人の好む曖昧な表現方法を取りやめるなら、嫌いだ。

理由は、標準的環境で成長した日本人に推察できる範疇。日本で花の名前を付けられた少女は、「名前と実像」と題されてしかるべき迷れられない宿命を負う。

ユリ。漂う香りは清冽、純白の花は清楚、にもかかわらず、すらりとした姿勢を活かしてたてれば部屋の雰囲気がぐっと変わる強い存在感……嫌いではない、むしろ好きな方だ。ただ、日本人はあの花を高嶺に置きすぎている。

よつて。

親戚が集まつた席で微妙な視線を送られてしまつたりもするだろう。届けてもらつた生徒手帳が、迷わず隣の友人に渡されたりもするだろう。委員会で初顔の後輩に、顔を見た後、三秒の間を空けてから挨拶されるという不可思議な現象に遭遇したりも……。

「しないよね、普通」

「いくらなんでもないでしちゃうね、普通」

机に突つ伏した頭を横向きにする。

「初対面の人のソラ見て“え”つて顔するのは極刑に値すると思わない、トーコさん……」

呪詛に満ちた声を吐くと、百合はあんただといいたくなる美人さん（私の生徒手帳を渡されたのはこいつだ）は桃色の爪に息を吹きかけた。

「価値のない思考を人に押しつける前に、名は体を表すという言葉が存在する国に生まれた自分を妬いなさい、ゆ・り・ぢゅ・ん」

「ゆりちゃんなんゆーな冷東子」

途端、頬にひやりとした指先が這い、鋭利な桃色の凶器が軟らかな肉を圧迫する。

「百合?」

甘ったるいお花畠が永久凍土へ変化した。このままでは地球滅亡も近い。

「う、ゴメンね、東子ちゃん。ハヘー!」

一般的使用者が見あたらないことで有名な捨て身の愛嬌語とともに保身に走った。走つたが、何故だろ。爪の形が先よりはつきりくつきり切迫した気がしてならない。

「違うでしょ、『申し訳ございませんでした、東子様』。はい、どうぞ?」

明らかに同級生とかクラスメートとか小学校からの親友もじきとか誕生日の都合上いつこ下の女に使つことばではないですね、ソレ。

心の中では人権が生存していたものの、明らかな命令形の視線を前に屈服した。

リパートアフターilee。東子風に訳すと、繰り返せ、下郎。(ヤツは時代劇のファンだ。)

「モウシワケゴザイマセンデシタトウコサマ」

「そうそう、世の中弱肉強食なんだから言葉には気をつけないとダメよ?」

サバンナから日本の高校一教室までやつてきたライオンは、そういうつてにっこり笑う。齧も牙もないのに美しく獰猛だ。恐しい。ライオンの名は、功刀東子と書いて、「ぐぬぎとい」「と仮名をうつ。

刀と東が字面を引き締めるのか、格好いい名前だと思つ。何より、珍しい名字だ。彼女のご家族以外で耳にしたことはない。

出会いは小学四年生。進級直後の教室で、担任は、私の名前を「じいのえゆり」と読んだ。気持ちはわかる。九重と書いて「くのう

と仮名うつ人は少ない。私と東子は先生に名前を読んでもらえなかつた繋がりだつたのである。

当時の東子は、私ともども幼さに裏打ちされた可愛さこそあれ、間違つても美少女ではなかつた。現在進行形で美がつかない私が保証する。

なのに、いつの間にやらぐつと追い抜かれた。ついでに、性格と凶暴性もぐつと……やめた。とりあえず、ヤツは合氣道4段だとだけいつておく。

東子は天然で色素が薄い。髪は地毛では珍しい赤茶色。細くて柔らかい。面倒を見るのが一苦労タイプの髪質ではあるが、ケアが完璧なのでそりやもう美しいの一言である。輪郭にゆがみがなく、目鼻の配置がいい、唇の色も形も絶妙。健康的な白さを保つ肌。スポーツで適度に鍛えられた手足はすんなりと長い。だが、友人としてモデルの道だけは薦めないでおこう。東子の暴力癖がなくなるとは思えない、関係者が気の毒すぎる。私でさえこの暴力美人と話すたび、人間の評価は外見で決めてはいけないと認識を改める有様だ。なのだが。

同時に、やつぱり美人はイイ……と思わずにはいられないのも事実だ。

熱心にネイルアートに励む東子を見るのは楽しい。正直、彼女の友人を全うできる理由の50パーセントは彼女の鑑賞的価値高き外見にあるような気さえする。

……しかし、言い換れば、ライオンの凶暴性その他諸々に目をつむつてしまふ面食いということに。

ショックだ。危機感知能力の欠陥じやないのか、まずくないか、自分。

発覚した事態にワナワナふるえている私を放置して、1Cのライオンは颯爽と立ち上がりつた。ようやく爪のお手入れに満足したらし。目立つた汚れのない学生鞄を片手に、満足そうに微笑んでいる。このライオンは己の美貌を磨くことに関しても手は抜かないでの、

草食動物たちより遙かに丁寧な仕事をする。でも、そんな様子を他人には決して窺わせない。（私がいても気にしてるのは友情であつて、草食動物に食われる草以下認識のせいではないと信じている。疑つたら負けだ。）

プライドの高い百獸の王。九十九頭を高みから見下ろす雄姿に反して、影でせつせと努力する姿はいじましく、ちよつと可愛い。さて、いじましいシーンを終了したライオンだが、コートを着るなり一言。

「百合。貧乏摇すりはやめなさい、これ以上株価が下がつたらどうぞ責任をとつてくれるの？」

「…………」

貧乏摇すりじゃなくて我が身の欠陥に怖れを抱いていたんですねトーマさん。あと、私が何もしなくても上がった株価は下がる運命なんですよトーマさん…つーか株にまで手を出してたのが、あんた

…。

具体的に責任とらされる恐れが出てくるので反論はせず、黙々、鞄に何かをつつこみ素早く帰り支度を整える。対東子仕様の私はチキンだ。しかし、下手に反論するより平和と安全が約束されている。ほんとに世知辛い友人関係である。

帰り道の東子は機嫌がよかつたので、比較的安全と判断して再び愚痴を開始する。

「おかしーじやん。芳香剤としてばらまかれている現実に気づこうよ、うちのコリなんて勝手にうちの庭に現れて勝手に増殖していくんだよ根性たましい植物だよあれ」

もともとそのスペースにいたタンポポたちはいつの間にか姿を消した。

生存競争に敗れたのだと思うと、たくましいを通り越して生々し

い。

「見た目だけは文句なしに美しい花の代表でしょう。まあ、私のいとこは嫌っていたけれど」

「どうして？花粉症？」

「ユリの花が萎れると、白い首が折れるようで氣味が悪い、ですって。大した口マンチストだわ」

東子の声は、はっきり皮肉だった。

氣の毒に。

百合が嫌いないところも九十九頭の例に漏れず、一方的に睥睨され心理的に服従させられる関係なのだろう。うつかりもらした軽口が東子の地獄耳に回収されていびられているかも知れない。目に浮かびそうなリアルさが恐ろしいを通り越して、東子らしい。式にすると「恐ろしいく東子らしい」と表記される。

しかし、いとこ殿の解説に思わずひらめくものがあつた私は、迂闊にも口を滑らした。

「そつか、東子を花にするとユリなんだ」

「ふふ。百合、何が言いたいのかしら？」

「……」

あつれー。東子さんが今までになく可憐に笑つてますヨー？

唐突にやつてきた自分滅亡の危機に遠い目をしながら、脳内だけフル稼働できる人間とは、実に器用な生き物だ。現実逃避ともいう。「いや、ほら、私の名前は好きじゃあないけど、東子に似ている花を嫌いにはなれないな、とね？」

そういうことにしておこう。

「……」

東子は、美しい柳眉の間隙にしわを刻んだものの、黙つて革靴を進めた。若干速度が速い。

「どしたの、トーヨーさん？」

- 1 東子は怒っている。
- 2 東子は呆れている。

3 東子は私の殺害計画を練り始めたといひだ。……これではありませんように。

焦り始めた私の脳へ、冷たいソプラノが突き刺さる。

「百合のそういうところ、限りなく腹が立つ
やばい、限りなくーだ。

「とー…

慌てて追いかけようとして、やわらかな赤茶色の髪からとびだした桜色の耳が、もっと色鮮やかになつてゐることに気づいた。
おやおやおや。

東子の速度に調整しながら、ニヤニヤしてやる。

「トーセン、耳が赤い」

「頸骨へし折られたくなかつたら黙りなさい」

赤い耳のライオンは珍しく可愛いのであつた。（凶暴なままだが。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8935f/>

百合とライオン

2010年10月8日14時48分発行